

2022年12月18日主日礼拝 アドベントⅣ

説教題「愛の種」ローマの信徒への手紙 5章 5～10節

主任牧師 加藤 誠

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマの信徒への手紙5章8節)。

今年の漢字は「戦」という字が選ばれました。争いと戦争の「絶えない」私たちの世界。というよりも、争いと戦争を「やめられない」私たち自身の課題が、その漢字に映し出されていると思いました。毎日、世界中にまき散らされている「争いの種」「ケンカの種」の、その発生源をたどっていくならば、私たち自身の心の中に毎日芽生える「怒り」「憎しみ」に行き当たります。

毎日「争いと戦い」を止められない私たちを、主なる神はどう見ておられるのか。聖書によるなら、ノアの洪水の後(創世記9章)、神さまは「人が心に思うことは幼いときから悪いのだ。わたしは二度と洪水をもって地のすべてのものを滅ぼすことはしない」と固く誓い、そして「わたしは天と地の間に虹を置き、地上のすべての生き物との間に立てた永遠の契約を心にとめる」と言われました。その「永遠の契約」とは、神さまが愛をこめて命の息を吹き入れて創造された人間を「どこまでも生かす」という契約です。今朝のローマ書の言葉で言うなら「罪人である私たちを、それでも愛し続ける」という神さまの決断です。その永遠の愛の契約の故に、主なる神さまはイエス・キリストを送ってください、そのキリストを通して、今日も私たちの間に「愛の種」を蒔き続けてくださっているのです。

あるビジネスマンの経験談を読みました。もうかなり昔のこのことですが、その方が冬に東ヨーロッパの町に商用で出張に出かけた時のこと。商談の場所に向かって雪の降る道を急いでいると、リンゴ売りの少女がカゴをもって道端に立っていたそうです。「この時代にまさか、マッチ売りの少女かよ」と思ったそうですが、見ていると狭い歩道を行き交う大勢の人々の身体が次々に小さな少女に当たり、少女はカゴを落としてリンゴが雪の上にすべて転がってしまいました。「ここは日本じゃないし」、「自分はたまたま旅行で来ているだけだし」、「自分には関係ないことだ…」と、彼の心にいろいろな言い訳が浮かんで商用の場所に急ごうとした、その時、「何かが彼の心の中で弾けて」リンゴ売りの少女のところに戻るとこう言いました。「このリンゴ、ぜんぶ売ってくれないか?」。驚いた少女は彼の顔を見ながらこう言ったそうです。「あなたは、神さまですか?」と。

この人はクリスチャンではないので「神さまの働き」とか「神さまに導かれて」というような表現は使わずに「何かが自分の中で弾けた」と表現したわけですが、それだけにリアルだと思いました。「リンゴ、全部売ってくれない?」という言葉は、彼の優しさから出た言葉ではありません。彼の外側から、彼の計画や思いを超

えて、彼を突き動かす力が働いたということでしょう。神さまの働きはクリスチャンだけを用いるのではありません。神さまは今日も世界中の人びとの心に「愛の種」を蒔くために働かれていますのであり、その神さまの愛の働きに突き動かされた人たちが、自分では知らないうちに毒麦だらけのこの世界の中で神さまの愛の働きを手伝う者とされているのだらう…と思いました。

このビジネスマンの経験談を思い巡らしながら、主イエスが語られた「毒麦のたとえ」（マタイ 13 章）を想いました。ある人の麦畑に毒麦が生えてきました。僕たちが「行って、毒麦を抜き集めましょうか」というと主人は言います。「間違っ
て良い麦を抜いてしまうかもしれない。刈り入れまでそのままにしておきなさい。刈り入れの時、まず毒麦を集めて焼いてしまおう」と。

このたとえは何を教えているのでしょうか。一つは、私たちには良い麦と毒麦の見分けがつけられないということであり、もう一つは、私たち一人ひとりを正しく裁かれるのは、最後の時に再び来られる方、イエス・キリストのみであるということでしょう。私たちは自らの中に毒麦をたくさん抱えているような者であり、しかも自分の目に見える部分しか見えないので、他の人の言動の一部だけを見て「あいつは毒麦だから抜いてしまえ！」と断罪することはできないのです。使徒パウロもこう語っています。「ですから、主が来られるときまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます」（第一コリント 4：5）。私たちの罪を黙ってすべて十字架で引き受けてくださり、私たちのために執り成し祈り続けてくださっている主イエスのみが、私たちの目には見えていない闇の中に隠されている秘密も、人の心の企てもすべて正しく裁かれるのですから、私たちは「先走ってはならない」のです。

そして三つ目には、この世界にどれだけたくさんの毒麦がはびこったとしても、神さまの「愛の種」である良い麦の働きが最終的には毒麦の働きに勝利されるから、その希望において歩みなさいということでしょう。神さまが私たちの間に蒔いておられる「愛の種」の中で最大のものはイエス・キリストご自身です。「一粒の麦は、地の落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネ 12：24）。この「一粒の麦」とはイエス・キリストのことです。罪人である私たちが神の愛に立ち帰らせ、結びつけるために、イエス・キリストは十字架の道を歩まれました。正しい者のため、善い人のためではなく、罪人のため、毒麦をたくさん抱えて、世界に争いの種をまき散らしている者のために、イエス・キリストは十字架を受けてくださったのです。ここに神の愛があります。「私たちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛してくださり、私たちが生きる者となるために、御子をおつかわしになった」のです。この「愛の種」であるイエス・キリストの灯に照らされて「戦」あふれる世界を歩む力をいただいでいきたいのです。